

ペテロ第二の手紙1章12-21節 「残される御言葉」

1A 残すべき真理の言葉 12-15

- 1B 思い起こさせる働き 12
- 2B 奮い立たせる働き 13
- 3B 脱ぎ捨てるのが間近な幕屋 14
- 4B 去った後の思い出し 15

2A キリストの力と来臨の証し 16-18

- 1B 作り話 16
- 2B 御子としての栄光 17
- 3B 自分自身で聞いた御声 18

3A さらに確かな預言 19-21

- 1B 夜明け前の灯 19
- 2B 私的解釈 20
- 3B 聖霊の導き 21

本文

ペテロ第二の手紙 1 章の後半、12 節から今日は学んでみたいと思います。私たちは、初めの 11 節で、主イエス・キリストの恵みと知識によって成長することの教えについて学びました。ペテロの手紙の背景は、偽教師です。第一の手紙では、外からの圧迫や迫害において、キリストの苦しみにあずかる栄光であり、御心にかなったことであるという励ましを受けました。第二の手紙では、教会の中からの圧力です。それに対しては、十分に注意することはさることながら、十分に注意するためにも、私たち自身が霊的に前進することこそが、偽教師が教会には入り込むのを防ぐ、ということでもあります。

パウロは、テモテへの第二の手紙で、終わりの日は困難であるが、それは自分自身を愛する者、神を汚し、両親に従わず、不遜な者、汚れた者、情け知らずな者、和解しない者、そしる者、裏切る者、快樂を愛する者など、いろいろなことを列挙していますが、それが、「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。(3:5)」とっています。教会の中に、これらのことを持ち込む者たちが出て来ることを話しています。ペテロも、同じ問題に取り組んでいます。偽教師らは、敬虔を利得の道具とし、権威を侮り、好色に溺れており、それを神の名、キリストの名でも行なうことができるようにさせていく、という内容であります。

そこで、ペテロは、1 章の始めに、しっかりと、私たちが躓くことのないようにするための指導をしています。一つに、私たちが神の栄光と徳によって、召された者たちであるということです。神の召

しが、私たちが、永遠のいのちを得るようにするのですが、そのいのちには「敬虔」さがあります。敬虔とは、神のご性質にあずかって、神に似た者として生きるということです。これらが、恵みによって、賜物として与えられ、そのようになると約束されました。私たちは時に、自分は何も変わっていないと気落ちするのですが、いつもいつも、この約束があるのだと思い起こさないといけません。それから、「あらゆる努力をして」という言葉を使って、キリスト者が日頃の営みの中で、単に信じているというところから、しっかりと徳や忍耐、知識、自制、敬虔、そして兄弟愛と愛を付け加えていくことを話しています。それによって、多くの実を結ぶことができ、躓くことから守られます。そして御国に入る時に、豊かな恵みを受けることができると約束しています。

1A 残すべき真理の言葉 12-15

ですから、これから忍び込んで来る、いやもう既に忍び込んでいた偽教師の問題に対処するために、これらの積極的な、霊的成長への努力が必要です。ここでは、パウロが殉教してなくなった後の、今のトルコ、小アジアにある教会に対して、ペテロが引き継いで牧会的な手紙を送っているという背景を思い出してください。パウロがエペソにいるテモテに励ました手紙に、作り話をもって人々を律法主義や肉の欲望の中に墮落させている教師たちに対処しなさいということを命じていましたし、使徒の働きでもパウロが、エペソから来た長老たちに対して、狼があなたがたの中から出て来るという警告を、エルサレムに行く途上でしていました。けれども、パウロは自分の語った御言葉が、必ずや彼らを成長させ、御国を受け継ぐことができるようにすると確信していました。「使徒 20:32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができます。」そして今、ペテロ自身が殉教することを目の前にしています。それで、何を残すべきかを話しています。霊的成長の努力もそうですが、これからは生きた使徒たちが語ることはできなくなります。そこで、使徒たちの教えを書き残し、それを思い出させる働きへと移っているのです。

使徒たちは、その信仰の継承に成功したと言えるでしょう。彼らはこのようにして福音書や手紙を書き残し、それが初代教会の聖徒たちがしっかりと守り、後世に教会指導者らによって長年をかけ、何が神の靈感を受けた真正な言葉であるか審議して、数ある手紙の中から厳選し、このようにして新約聖書を編纂したのです。ですから、私たちは使徒たちの言葉を、その書かれた言葉を神からのものであると信じて、その書かれた御言葉によって生きています。悪しきものや偽りから、私たちが守られるのは、これら書かれた神の言葉によるのです。

1B 思い起こさせる働き 12

12 ですから、すでにこれらのことを知っており、現に持っている真理に堅く立っているあなたがたであるとはいえ、私はいつもこれらのことを、あなたがたに思い起こさせようとするのです。

ペテロは、彼らが自分の教えたことをしっかりと知っていること、しかも真理にも堅く立っているこ

とも知っていました。興味深いことに、ここで「堅く立っている」という言葉は、イエス様がペテロに使われた言葉と同じ言葉が使われています。「ルカ 22:32 しかし、わたしは、あなたの信仰がなくなるように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」ここの、「力づけてやりなさい」という言葉が、堅く立つと同じなのです。つまり、ペテロはイエス様が言われた通りに行ったということです。ペテロは、まさにここで自分が信者たちに警告していることを、やってしまいました。つまり、躓きました。イエス様には、命をかけてついていこうと言いながら、舌の根も乾かぬうちに「私は、あの人を知らない」と三度、毒づいて言い放ったのです。しかし、そのことを全てご存知でイエス様は、前もって、「あなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言いました。彼は、躓いてしまった人々の弱さや気持ちを同情できない人ではなく、まさにそのようなところを通った一人の失敗した者として、同じ目線から、私たちに励まし、躓くことがないように教え、励ましています。

知っているのに、しかもその真理はしっかり堅く立っているのに、それでもなお彼が手紙を書いているのはなぜか？ところでペテロの教えたことは、第一の手紙だけではありません。実は、マルコによる福音書は、ペテロの証言していたことを書いたと言われています。これらのことを、ペテロは忠実に教え、そして信者、聖徒たちもこれらをしっかりと聞き、その真理を堅く保っていました。けれども、それだけでは足りないと思いました。これからペテロは、死んで天に召されます。彼らは、自分の教えたことを「思い出してもらおう」ことが必要だと感じていました。

イエス様ご自身がその働きを、聖霊によって行なうことができることを弟子たちに話しておられました。「ヨハネ 14:26 しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。」聖霊の働きは、主が教え、話されたことの全てを思い起こさせてくださるものです。私たちは、聞いていて、それでそれを信じて、しっかりとその教えは守っていると思っていたとしても、実は忘れていることが多々あります。その時に新たな教えは必要ありません。「この教えに基づいて生きているのに、なぜ生活はうまく行かないのだ。キリスト者は、聖書の教えだけで十分に足るのだろうか。」というようなことを言いかねない雰囲気、教会の中にあります。いいえ、なぜうまく行かないのかは、それらの教えに不足があるからではありません。私たちが忘れてしまっているからです。ですから、聖霊によって、主の語られたことを思い起こさせていただく必要があるのです。主が天に昇られて、神の右の座におられる時に、もうひとりの助け主である御霊によって主は共におられて、私たちにご自分の語られたことを思い出させるのです。

キリスト者であれば、何度も同じことを聞くことがあります。十字架の言葉は、まさにその通りでしょう。そして、説教壇から同じ言葉を聞いていると、「また、同じことを話しているな。十分に信じていますよ。」という思いがよぎります。けれども、実はそのことに欠けているからこそ、聖霊が語っておられることが、しばしばなのです。何度も聞いているのに、実は、その御言葉の中で自分は成長

しなければいけないことを教えられているから、語られています。

2B 奮い立たせる働き 13

13 私が地上の幕屋にいる間は、これらのことを思い起こさせることによって、あなたがたを奮い立たせることを、私のなすべきことと思っています。

ペテロが願っているのは、自分がまだ生きている間、彼らを「奮い立たせること」でした。この、「地上の幕屋」というのは、肉体のことです。その肉体がまだ生きている間は、彼らが自分たちも知っている真理を思い起こして、奮い立つことを願っています。

イエス様は、ご自分が甦られてからこの働きを行なっておられました。主は既に数多く、キリストが苦しみを受け、そして甦ることについても、死なれる前に何度も語っておられました。けれども、甦られて弟子たちに近づかれる時に、その生々しい現実、すなわちご自分の手に釘の跡があること、腹に突き刺された跡があるのも見せ、共に食事を取られたという証拠を残されただけではなく、聖書の言葉が実現したことを、説き明かすことに時間を費やしました。主が甦られたその日、夕方になってエルサレムから離れ、エマオという村に歩いて行った二人の弟子がいました。主は彼らと共に歩かれて、質問をされましたが、彼らは既に十字架に付けられて死んでしまったことを話しました。けれども、朝方、女たちや他の弟子たちが、墓にイエスがおらず、イエスは生きておられるのだと言っているというのだとも言いました。それでイエス様は、こう言われたのです。「ルカ 24:25-27 するとイエスは言われた。「ああ、愚かな人たち。預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。キリストは、必ず、そのような苦しみを受けて、それから、彼の栄光にはいるはずではなかったのですか。」それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。」聖書全体から説き明かされたのです。そして弟子たちは、イエスと共に宿泊することを無理に願い、共に食事をしました。パンを裂いた時に、彼らはイエスだと分かったら、その時に主は見えなくなりました。そして彼らは言ったのです。「24:32 道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。」心が内に燃えていたのです。奮い立ったのです。聖書を説き明かし、そして教えられていたことを思い出して、それで奮い立ちました。今、このことを弟子の一人であるペテロが、後世の聖徒たちのために行なっているのです。

3B 脱ぎ捨てるのが間近な幕屋 14

14 それは、私たちの主イエス・キリストも、私にはっきりお示しになったとおり、私がこの幕屋を脱ぎ捨てるのが間近に迫っているのを知っているからです。

ペテロは、自分の肉体のことを「幕屋」と呼び続けています。地上の幕屋と言っているのは、イスラエルの荒野の旅において、イスラエルが仮の庵として住んでいたものです。一時的であり、かつ

不便なものです。どこかに住んで定着すれば、家を建てることができます。主の住まい自体がそうでした。主の会見の天幕は、雲の柱が動くたびに取り外して移動できるようにしていました。移動可能な住まいです。そして、主がアダムに与えられた、地上の塵から造られた体は地に変えるものとして、それは一時的であり、主が天から与えられる、御霊に属する栄光の体をもって甦らせると神はお決めになっていたのです。それで、肉体は衰え、弱く、アダムからの罪を宿しているのに対して、栄光の体は朽ちることがなく、主の命によって力を持ち、そして罪そのものも存在しない体として、それが永遠の家として考えることができます。パウロもまた、同じ表現を使いました。「2コリント 5:1-4 私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのにのまれてしまうためにです。」そもそも、私たちの本質は霊であり魂であり、体というのは器にしか過ぎません。器によって、私たちの霊が何を感じ、何を思っているのかを知ることができますが、器に私たちの本質はありません。

そしてペテロは、「私たちの主イエス・キリストも、私にはっきりお示しになったとおり」と言っています。イエス様が、復活された後にペテロにお語りになっていたことでした。「ヨハネ 21:18 しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせて、あなたの行きたくない所に連れて行きます。」言い伝えによりますと、ペテロはローマで、逆さ磔によって殉教しています。十字架刑にされそうになった時、「私は主と同じように死ぬことはできない。逆さに磔してほしい。」と申し出たということです。ですから、彼は間近に迫っていることをかなり意識して、彼らに自分の教えたことを思い起こし、奮い立ってほしいと強く願っていました。

4B 去った後の思い出 15

15 また、私の去った後に、あなたがたがいつでもこれらのことを思い起こせるよう、私は努めたいのです。

ペテロが、自分が死ぬことを、「去った」と言っています。ここのギリシヤ語は「エクソドン」というもので、英語は「エクソドス(exodus)」つまり、出エジプトに使われています。縛られているところ、奴隷状態であるところから解放されるということです。そしてペテロは、11節では「永遠の御国にはいる恵み」と言っていますが、ここの「はいる」は、「エイソドス」であり、エクソドンの反対の言葉です。つまり、ペテロの中には肉体または地上という束縛から解放されて、神の御国に入るといった思いがここに反映されているのでしょう。

実は、ここの「去る」という言葉を、次のイエス様が変貌することを目撃したという出来事でも使わ

れています。そこでイエス様はモーセとエリヤと話しておられましたが、「ルカ 9:31 栄光のうちに現われて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。」と書かれています。ここの「ご最期」は、エクソドンなのです。つまり、イエス様は十字架の死によって、ご自分の肉体からの解放もあり、かつそれは、人類が罪と死の縄目から解放されることも意味していたのです。もちろんペテロは、自分の死が人々の解放に向かうなどという事は一切考えていませんが、キリストの死による罪からの解放の御業は、続けて行なわれていくのだという思いはあったことでしょう。私たちが、そのような神の救いのご計画の中に生きているのだということを知るべきです。

2A キリストの力と来臨の証し 16-18

このようにしてペテロは、彼らが思い起こし、奮い立つことを目的にしていると話しましたが、再び、キリストにある神の栄光と力について話します。1章 3-4節で、神の栄光と徳によって、私たちが世の汚れから免れ、神のご性質にあずかったのだという素晴らしい約束があります。その基になっている体験が、高い山でイエス様が変貌したという出来事です。

1B 作り話 16

16 私たちは、あなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせましたが、それは、うまく考え出した作り話に従ったものではありません。この私たちは、キリストの威光の目撃者なのです。

ペテロは、「私たちの主イエス・キリストの力と来臨とを知らせました」と言っています。これは、彼がしばしば語っていたことであり、第一の手紙で語っていたことです。「1ペテロ 1:7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。」イエス様が現れること、これは主が再び来られることを意味しています。キリストの力と来臨を彼は知らせていました。

そして彼はそれを、「作り話に従った」のではないと言っています。パウロもペテロも、偽教師たちが「作り話」あるいは「空想話」に囚われている話をしていきます。「ある人たちが違った教を説いたり、果てしのない空想話と系図とに心が奪われたりしないように命じてください。(1テモテ 1:3-4)」「彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。(2ペテロ 2:3)」ユダヤ人の中に、口伝律法ミシュナにおいて、逸脱した作り話が流行っていたということが、注解書を見ると書かれていました。明確に、モーセ五書や預言書、歴史書などに書かれていない、まさに人の想像や憶測の域を超えていない話に逸らしていく者たちが教会には入り込んでいた、とのこと。私たちが、神が罪人を救われるというそのご計画の枠から大幅に外れる話に気を付けなければいけません。

けれども、キリストの力と来臨については、ややもするとそれまでを「作り話」の中に入れられる、反動もあります。3章において、その動きについてペテロが警鐘しています。まだその来臨の約束を見ていない、地上は昔から変わっていないではないかと、あざける者たちが出て来るというのです。そして事実、そのようなあざけりをキリスト者は再臨の希望によって受けてきています。そして実に、教会の中にさえ、そのようなことを教える人々が現れています。教会で、一度も再臨について教えられたことがないというキリスト者は数多いです。そして、キリストが天から来られて、私たちを空中にまで引き上げるという携拳の出来事を、「作り話」と断じている書籍を、ある著名な福音派の神学者の書いたものの中に見つけました。

しかし、主はペテロ、そしてヨハネとヤコブに、そのような誹りを受けることを知ってか、前もって御国の栄光と力をお見せになったのです。イエス様は、ピリポ・カイザリヤにおいて、ご自分が誰であるか弟子たちに尋ねられました。ペテロが、「生ける神の御子キリストです。」と答えました。そして、ご自身が苦しみを受けて、三日目に甦ることを話されました。そして、自分を捨て、自分の十字架を背負い、そしてわたしについて来なさいと語られました。そしてこう言われています。「マルコ 9:1 まことに、あなたがたに告げます。ここに立っている人々の中には、神の国が力をもって到来しているのを見るまでは、決して死を味わわない者がいます。」神の国が力を持って現れるということ、それまで生きているのだということです。

そしてそれが六日後に、ペテロとヨハネ、そしてヤコブが経験したのです。「9:2-8 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった。その御衣は、非常に白く光り、世のさらし屋では、とてもできないほどの白さであった。また、エリヤが、モーセとともに現われ、彼らはイエスと語り合っていた。すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。私たちが、幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」実のところ、ペテロは言うべきことがわからなかったのである。彼らは恐怖に打たれたのであった。そのとき雲がわき起こってその人々をおおい、雲の中から、「これは、わたしの愛する子である。彼の言うことを聞きなさい。」という声がした。彼らが急いであたりを見回すと、自分たちといっしょにいるのはイエスだけで、そこにはもはやだれも見えなかった。」ペテロは、このことについて話しているのです。ペテロ自身が、地上の幕屋から去り、永遠の御国に入ることを確信していましたが、キリストご自身が肉体をもって生まれた時に、ちょうど幕屋の幕のように、神としての栄光の現れは隠されていました。けれども、主はここにありのように栄光と力が現れています。そして大事なものは、ここにモーセとエリヤが表れていることです。モーセは律法の代表、エリヤは預言者の代表です。つまり聖書全体を示していて、聖書全体がキリストを証言しているということです。しかも、ルカの福音書によれば、彼らはキリストがエルサレムで最期を遂げられることについて話し合っていました。律法も預言書も、キリストの苦しみについて証言していたのです。

この苦しみを経たところにある先が栄光だということです。このキリストに従う者が、キリスト者です。ヤコブは、ヘロデによって殺されました。ペテロもネロによって殺されました。そしてヨハネは殺されようとされましたが、言い伝えによると、煮え切った油に入れられても害を受けず、パトモス島に流刑になりました。苦しみを経たところにある栄光こそが、御国の栄光と力の現れであることが、ここではっきりと分かります。

2B 御子としての栄光 17

17 キリストが父なる神から誉れと栄光をお受けになったとき、おごそかな、栄光の神から、こういう御声がかかりました。「これはわたしの愛する子、わたしの喜ぶ者である。」

今、読んだところにありました。イエス様がバプテスマを受けられた時に、天からの声があり、そして高い山、おそらくはピリポ・カイザリヤのところにある高い山ヘルモン山ですが、そこでイエス様は、父なる神から誉れと栄光を受けられました。そしてその声が、「これはわたしの愛する子」であります。詩篇二篇にもある、神によって生まれた御子であり、この方は永遠の昔からおられる方、神ご自身であります。この方が人となり、世の罪を取り除くキリスト、救い主なのです。この告白をしたのがペテロでしたが、イエス様ははっきりと、そのことの確証を高い山でお見せになりました。そしてこれはまた、後に来る御国の到来の前触れでもあったのです。

3B 自分自身で聞いた御声 18

18 私たちは聖なる山で主イエスとともにいたので、天からかかったこの御声を、自分自身で聞いたのです。

その高い山のことを「**聖なる山**」と言っています。旧約のシナイ山のことを、彼は意識していたことでしょう。高い山にモーセが上りましたが、そこに主が燃える柴の中で現れて、「ここは聖なる所である。」と言われて、モーセは履き物を脱ぎ、礼拝しました。同じように主の栄光と力が、キリストによって現れたのです。そして、「この御声を、自分自身で聞いた」と言っています。かつてのイスラエルの民も十戒を自分自身の耳で聞きました。それは死にそうなるほど、恐ろしい事であったと民は言っていました。ペテロは恐れを感じながらも、喜びもともなった恐れであったことでしょう。御声を確かに聞いたのです。

3A さらに確かな預言 19-21

このようにして、偽教師たちがキリストの来臨などないということについて、彼はその威光の目撃によって反論しています。けれども、主ご自身が復活の時に、ご自分の姿を見せただけでなく、聖書を説き明かされたように、もっと確かなのは聖書の言葉なのです。体験が真実ではなかったということではなく、真実なのですが、体験ではなく、語られた言葉そのものが、さらに確かなものであり、永遠に続き、決して変わることがないということをペテロは強調します。

1B 夜明け前の灯 19

19 また、私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

ここで、「さらに確かな」と言っていることが大事です。その目撃の証言はあまりにも確かなものですが、それよりも確かなものだということです。私たちは、自分たちが見て、聞いて、感じたことこそが最終的な事実であると思いがちです。けれども、どこまで確かなのでしょうか？主は、言葉によってご自分の真実を示されます。イエス様ご自身が、復活の後だけでなく、夜に捕えられる時も、剣を鞘に収めなさいとペテロに言われた後に、聖書に書かれていることが実現しなければならぬと言われて、反撃することを敢えてなさなかつたのです。マタイ伝は、ユダヤ人を意識して書かれてたと言われていますが、「預言者を通して言われたことが、成就するためであった」と書かれています。神が初めに語られ、そしてそれを実現させていくということは、例えばモーセが死ぬ直前に申命記 28 章以降で語って、それがヨシュア記以降に全て実現していつているのを見ているのですが、同じ方法を使っておられるのです。そして、イザヤ書においては、クロス王によってご自分の民が解放されることを、前もって告げることによって、「わたしは神である、他にはいない」と何度も何度も強調されています。キリストについての預言も沢山あります。ある人たちによれば、キリストの初臨については、三百以上の預言が、再臨については千五百以上の預言があるということです。聖書の多くの部分を預言が占めているのですが、なぜかキリスト教会では、その教えがどこか横に追いやられています。しかし、使徒ペテロ自身が、そのように言っているのです。

そして、「夜明けとなって、明けの明星があなたがたの心の中に上る」と言っています。これは、世の終わりになり、世が暗くなる。しかし、それはキリストの来臨によって終わり、明けの明星として主が来られるのだ、ということです。パウロは、世が終わりに近づくにつれて暗くなることについて、ローマ 13 章で話しました。「13:11-14 あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」

しかし、夜明け前に金星が天において、人一倍光っています。それから、光の大本である太陽が上ります。同じように主は明けの明星のような方であり、また、太陽のように御国が来たら光り輝いておられる方です。「マラキ 4:2 しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。」イエス様は、再び戻られることについて、黙示録の最後で「輝く明けの明星(22:16)」と呼ばれています。

そして、預言を「暗い所を照らすとしび」としていなさい、と勧めています。いかがでしょうか、ペテロは、霊的成長についての教えと共に、書かれてある神の御言葉を心に留めていなさいと勧めているのです。

2B 私的解釈 20

20 それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。

聖書の預言について、ペテロは注意を与えています。「人の私的解釈を施してはならない」と言っています。これは、人間の書いたものではないですから、その解釈においても神である聖霊の導きに拠らなければいけないということです。パウロが、説き明かしも聖霊によって行なうことについてこう話しました。「1コリント 2:12-13 ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。それは、恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。その御霊のことばをもって御霊のことを解くのです。」

3B 聖霊の導き 21

21 なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。

ペテロは、手紙のこの個所以外にも、預言が聖霊に動かされた人によって書かれていることを話しています。例えば、使徒行伝1章です。「兄弟たち。イエスを捕えた者どもの手引きをしたユダについて、聖霊がダビデの口を通して預言された聖書のことばは、成就しなければならなかったのです。…『彼の住まいは荒れ果てよ、そこには住む者がいなくなれ。』『その職は、ほかの人に取らせよ。』(16、20節)」ダビデが語ったときに、それは聖霊が彼を動かしておられた、ということです。ダビデ自身も、聖霊が自分を通して語らせておられることを話しています。第二サムエル23章2節です。「主の霊は、私を通して語り、そのことばは、私の舌の上にある。」イエスさまも、ダビデについて同じこととお語りになっています。マルコ伝12章36節です。「ダビデ自身、聖霊によって、こう言っています。『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。』」このように、預言は聖霊に動かされた人によって書かれており、人間の思いによって書かれたものではありません。

そして、有名な聖句テモテ第二3章16節があります。「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。」一言でいえば、「聖書は神のことば」です。当たり前のように聞こえますが、しかし、ペテロは、「これらのことを思い起こさせたい」と言っています。預言のみことばに心を留め、そしてキリストの知識にあってさらに成長します。